

令和六年度西条市交通安全市民大会

交通安全作文優秀作品

西条市交通安全推進協議会

目次

○神拝小学校	二年	越智 <small>おち</small>	咲菜 <small>さくな</small>	まの七さい	3
○多賀小学校	三年	塩崎 <small>しおざき</small>	悠人 <small>はると</small>	一つしかない いのち	5
○西条小学校	五年	梶田 <small>かじた</small>	梨央 <small>りお</small>	あせらず、油断せずに	7
○大町小学校	六年	大西 <small>おおにし</small>	紅輝 <small>こうき</small>	交通事故をなくすために	9
○徳田小学校	六年	今井 <small>いまい</small>	秀朋 <small>ひでとも</small>	自転車を正しく使おう！	11
○西条西中学校	一年	伊藤 <small>いとう</small>	勇馬 <small>ゆうま</small>	交通事故の体験から考えたこと	13
○丹原東中学校	一年	飯尾 <small>いとお</small>	仁 <small>じん</small>	いつも通りに過ごすために	16
○東予東中学校	一年	都谷 <small>つたに</small>	羽菜 <small>はな</small>	油断は禁物	18
○小松中学校	一年	桑原 <small>くわばら</small>	一真 <small>かずま</small>	命を守るために	20
○西条東中学校	三年	河野 <small>こうの</small>	壮一郎 <small>そういちろう</small>	「なぜ？」を考える	22

まの七さい

神拝小学校 二年 越智 咲菜

あとすこしで三月十五日。三月十五日は、わたしの七さいのおたん生日。

「七さいになったらじてん車にのってあそびに行つていいよ。」

とお母さんとやくそくをしていました。ともだちはみんなじてん車にのってあそびに行っていたけど、わたしのたん生日は、三月、まだ六さい。いつもみんなのじてん車におくれないようにはしつてあそびに行っていました。だから、七さいのおたん生日をとてまたのしみにしていました。

「おたん生日おめでとう」。

ついに、わたしのおたん生日が来ました。わたしは、さつそくともだちとじてん車にのってあそびに行くやくそくをしました。ヘルメットをかぶる。道をわたるときはとまる。お母さんに言われたことをまもってあそびに行きました。

じてん車にのると、とつても気もちがいいです。

遠くまではしつてもぜんぜんつかれません。風がビュービューふいてとんでいる気ぶんになります。じてん車はさいごうのりものです。わたしは毎日じてん車であそびに行くようになりました。

あるとき、いっしょにじてん車ではしつているともだちに、

「もつとスピード出そう」。

と言いました。

「いいね」。

と言ってくれたので、いっしょにビュンビュンじてん車をこいでいると。

「キキーツ」。

きゆうに小さい道から車がとびだしてきました。びつくりして、いそいでブレーキをかけました。

「ドン」。

よこを見ると、ともだちが車にぶつかっていました。わたしがスピードを出そうと言ったからだろうし、よう。と思つていると、車から女の人のおりてきて、けがをしていないか見てくれました。大きなけがはなく、わたしたちのことをともしんばいしてくれ

ました。ともだちがけがをしなくて本当によかったです。
です。

家にかえって、お母さんにこの話をすると、

「まの七さいだね」。

と言われました。七さいは、こう通じこがとても多いそうです。

せっかくじてん車にのってあそびに行けるようになったさいこの七さいが、こう通じこでいたくてかなしいまの七さいにならないように、これまでいじょうに気をつけようと思いました。

一つしかない いのち

多賀小学校 三年 塩崎 悠人

ぼくは小さいころ、チャイルドシートのかたベルトが苦手で、泣いたり、かたをぬいたりして、お母さんをこまらせていました。ベルトで、体がしめつけられるのがつらかったからです。

その時、お母さんからこんな話を聞きました。

「ベルトをしていないと、交通事故にあった時に、事故のしょうげきで体を強く打ったり、体がフロントガラスをつきやぶって、外にほうりだされたりすることもあるよ。車の運転に気をつけていても、交通事故にあらうこともあるから、一つしかないのちをベルトで守ってね。」

話を聞いた時、ぼくは、この話をこわいと思ったけれど、運転に気をつけているのに、なぜ事ここにあうのが分かりませんでした。

昨年、お父さんが車を運転して家族で出かけている時に、とつぜんお父さんが急ブレーキをふみまし

た。前方横から、ぼくたちの車が走っていることをかくにんしないで、急に車がとび出してきたからです。その時、ぼくは後部ぎせきでシートベルトをしていましたが、急ブレーキで体が前のめりになり、足も少しうきました。さいしよは何がおきたのか分からず、心ぞうがバクバク鳴っていました。とてもこわかったです。お父さんが前をきちんと見て運転していたので、事ここにはならなかったし、だれもケガをしなかったので、本当によかったです。

その後、お父さんから、車にのった時はかならずシートベルトを着けるぎむがあることと、六才より小さい子どもはチャイルドシートを使うぎむがあることを教わりました。ただ、ぎむであっても、後部ぎせきにすわっている人は、シートベルトをしていないことが多いそうです。

昨年、えひめ県で発生した交通事故は、二千百三十二人で、四十四人が亡くなったそうです。その中で、十三人はシートベルトをするひつようがあったのに、九人はしていなかったそうです。インターネットで調べるとシートベルトをしているかどうか

で、事ここにあった後のじょうたいがかなりちがうことを知りました。

これらのことから、事ここがおきないように気をつけることも大切なのですが、もしものことを考えて、いつもシートベルトを着けておこうと、ぼくは強く思いました。車にのるのはほんの少しの間です。きゆうくつだから、といった理由でシートベルトをしないのではなく、大切な家族を守ってくれているのだと感しやをして、これからも車にのるときはかならずシートベルトを着けます。そして、交通ルールを守り、自分や家族のいのちを守りたいです。

あせらず、油断せずに

西条小学校 五年 梶田 梨央

みなさんは、危険な思いをした経験はありませんか。また、交通事故などの現場を見たことはありませんか。私は一年生の時に経験したことがあります。「あそこの道は、左右をよく確認して行くようにしてね。じゃないと交通事故にあってしまうよ。」

友達の家に行く時は必ず、お母さんが真面目な顔でこの話をしてくれました。いつもは笑顔のお母さんが真剣な顔をして話してくれました。私は大事な話だと思いつつも、心のどこかで交通事故は私には関係ないと思っていました。あそこの道が危ないということは、一年生の私も知っていたけれど、普段から特に何も気にせず、お母さんから言われている言葉も思い出さずに通っていました。

「あそこの道、気を付けて行ってね。」

その日もいつものようにお母さんの話を聞きました。その後、自転車でお母さんの家に行こうとあの道を通る時、危ないということを知らない人が、何も気

にせずに通っていました。

その時、事件は起きたのです。となりからいきなり、「キキーンッ！」と大きな音を立てながら車が飛び出してきました。自転車に乗っている人は、焦った顔をして急ブレーキをかけました。あと少しのところで大事故になっていたのです。その様子を見ていた私は普段通っている道でこんな事故が起こりそうになるなんて思いも寄らず、びっくりしてしまいました。自転車の人が急ブレーキをかけていなければ、交通事故になっていました。車を運転していた人も本当に焦った顔をしていました。そのあと、車を運転していた人も自転車に乗っていた人も、反省したような顔で頭を下げ、おたがいに謝っていました。

それを見ていた私は、毎日お母さんから言われているあの言葉を思い出しました。そして、この道には気を付けていないと、こんな目にあうんだな。お母さんの言っていることは本当なんだな。と、その時やっと心から思うことができました。事故が起こりそうになった道を通って帰る時、初めて左右確認

して、気を付けながら帰ることができました。

その日の夜、お母さんに今日あの道であった出来事を話しました。すると、お母さんは、

「交通事故は自分が気を付けていても相手が気を付けていなければ起こることだよ。交通事故は取り返しのつかないことになることもあるから自分から気を付けようね。」

と話してくれました。そのことを聞いた私は、

「私も気をつけないとな。あのときは、車に乗っていた人も、自転車に乗っていた人もどちらも焦ったような顔をしていたから、どちらも油断をしてたんじゃないかな。」と思いました。

また別の日にこんなことがありました。友達と遊びに行き、あの危ない道を通ることがありました。

私は友達に、

「あそこの道、よく左右を確認してね。交通事故は油断している時に起きるんだよ。」

私は、お母さんが言っていることをまねして言いました。その時は車が来ていませんでした。

「確認しなくても事故になることなんてないじゃ

ん。」

と友達に言われました。

「前、私は交通事故になりそうなところを見たんだ。本当に危なかったんだよ。」

と私が言うと、友達は何も言わずに道を通り過ぎていました。けれど、帰り道にはちゃんと気を付けて帰ってくれていました。友達は交通事故にあいたくなかったのかな、交通事故は油断している時に起きることを分かったのかな、と私は思いました。

交通事故はいつ、どこで起こるか分かりません。

危ない道でも普段から事故が起こるわけではありません。自分は事故に会うことはないだろうと油断するのではなく、お母さんが毎回言っているように、

「左右を確認すること」「曲がってくる車に気を付けること」をたくさんの人に広めたいです。交通事故はけがで終わることもあれば、命を落としてしまうこともあります。私は、だれにもこんな経験はしてほしくなくと思っています。みなさん、道路を通る時には、油断することなく安全に気を付けてください。

交通事故をなくすために

大町小学校 六年 大西 紅輝

ぼくのおじいちゃんは、七八さいです。今年、自動車免許を返納しました。おじいちゃんはこのごろ足や腰が痛くて、運転が不安だったそうです。

「もし、自分の運転ミスで人をはねてしまつたら：と考えるとこわい。」

と言っていました。だから、車で病院や買い物に行けなくなつても、免許を返納することを決めたそうです。ぼくは、そんなおじいちゃんがすごいと思いました。なぜなら、交通事故を防ぐために、自分が不便になることを選んだからです。

ぼくは、高れい者による交通事故について調べてみました。高れいドライバーとは、六五さい以上の運転者のことを言うそうです。現在、高れいドライバーによる交通事故件数は、全体の四分の一と高い割合になつていゝそうです。高れい者の交通事故の原因の一つは、身体や脳の機能のおとろえです。年をとると、ぼくのおじいちゃんのように、足や腰が

悪くなつたり、判断力や注意力が低下するそうです。また、今までの運転経験から、

「自分は大じょうぶだろう。」

という自信が、事故の原因になることもあるそうです。

テレビでは、毎日のように交通事故のニュースが流れています。ブレーキとアクセルをふみ間ちがえた事故。高速道路を逆走して起こつた事故などのニュースです。ぼくも、スイミングスクールに行くときちゆうで事故にあつたことがあります。バスに乗つてスイミングスクールに行つてゐる時、友達と話をしていたら、目の前の店に車がつつこんできました。ぼくたちが乗つてゐたバスは無事でしたが、つっこんだ車やお店がこわれてゐました。ぼくは、とてもこわい思いをしました。そして、事故が起こつてしまつてからでは、どうすることもできないのだと思ひました。

ぼくが交通事故をなくすためにできることは、ぼくのおじいちゃんのように、事故を未然に防ごうことだと思ひました。例えば、いつも通る道でも、安心

だと思わずにきちんと安全確認をすること。青信号でも、左右を見て車が来ていないかをしっかりと確認してから横断歩道を渡ること。「もしかしたら」という意識をわすれずに、いつも安全に気をつけて過ごすこと。このように、身近な危険を想像しながら過ごす人が増えれば増えるほど、交通事故は減っていくのではないかと思います。

自転車を正しく使おう！

徳田小学校 六年 今井 秀朋

みなさんは、自転車で事故にあったことはありますか？

インターネットで調べると、小中学生による自転車の事故や破損が多く、六月に事故が多い事がわかりました。他にも調べてみると、様々なサイトがヘルメットの着用などを呼びかけていました。（参照・愛媛県警察本部交通部交通企画課、愛媛新聞ホームページ）

自転車の正しい乗り方をしっかり学んでいないと周りの人に迷惑をかけてしまうことがあります。ぼくがそう考える理由は、友達と遊んでいるとき、友達かふざけて自転車に乗っていて車道に出してしまい、危うく車にはねられそうになったことがあるからです。その時、ぼくは友達に向かって、

「危ない。」
とさげびました。

事故になりそうだったときの時刻は午後一時半頃

でした。場所は学校の近くの坂道、季節は春。新学期が始まってすぐのことでした。もし、あのまま友達が車にはねられていたら、ぼくは小学六年生の一年間を暗い雰囲気でごすことになってしまおうところでした。事故を一度経験してしまおうと一生トラウマを背負っていかないといけないと考え、事故の恐ろしさを実感した瞬間でした。

ぼくはこのような周りの人に恐ろしい思いをさせてしまうような出来事を無くす方法を考え、提案します。

自転車は体力の消もうがほぼなく、スピードが速く出て手軽に使えるので便利です。しかし、使い方を間違えると大事故にもつながりかねません。自転車に乗っているときに、ついつい友達と遊んで気持ちの制御が効かなくなってしまうことがあります。とがあり、こういう時に事故は起こりそうになります。どんなに楽しくても、自転車を正しい乗り方で乗っていたら、事故にはなりません。ぼくは、自転車に乗りながら、友達を笑わせようとしてしまうことがあります。しかし、みんなを楽しんでいる気持ちにさ

せるのと、ふざけるのは違います。

ぼくがふざけて笑わせようとする、友達は、

「大丈夫？それ。」

「事故にならないよね？」

と言ってくれます。それを聞いて、友達を楽しい気持ちにさせるより先に、不安な気持ちにさせてしまっていたことに気づきました。だから、自転車に乗るときは楽しい気持ちにさせようとせず、自転車の運転や操作に集中しましょう。ぼくも自転車に乗りながらではなく、自転車から降りて休けいするときに楽しいことをしてみようと思います。

交通事故の体験から考えたこと

西条西中学校 一年 伊藤 勇馬

今から四年ほど前、僕は交通事故に遭いました。

その当時僕は小学三年生で、友達と一緒に、別の友達の家自転車遊びに行く途中でした。友達と楽しく話しながら道路を走っていて、十字路に差しかけたその時です。右側から走ってきた車と接触しました。どんつという鈍い音と共に、僕は道路へ投げ出されました。突然の出来事で、あまり詳しくは覚えていませんが、耳鳴りがして、鼻と口から出血していました。目の前にパトカーと救急車が来て、泣いている友達が見えました。

幸い、大怪我ではなかったので、僕の命に別状はありませんでした。しかし、今でもその時の傷跡は僕の体に残っており、事故の衝撃や記憶がトラウマとなっています。

僕が大怪我をせずに済んだのは、ヘルメットを被っていたからです。被るのを面倒に感じることもありませんが、あの時ヘルメットを被っていなかったら、

と思うとぞつとします。最悪の場合、死んでいたかもしれません。ヘルメットが僕の命を守ってくれました。今までは他人事のようにしか感じていなかった交通事故が、自分に起こって初めて現実味を帯び、ヘルメットを被ることの大切さを実感しました。事故は、本当に恐ろしいです。

もう一つ大切に思ったことは、曲がり角など、見通しが悪いところでは特に注意して、ミラーを見ることです。事故当時の僕も、多分、ミラーは見えていたと思いますが、絶対に車やバイクが来ていないかを確認できていたかと問われると、自信がありません。きっと、油断していたのだと思います。それと、ミラーを確認すると共に大切なのは、左右を目視することです。今思えば僕の場合も、停止線できちんと止まって左右の確認をしていたら、事故は防げていたかもしれません。

この経験から、道路に書かれている表示や標識に無意味なもの無く、道路を使うすべての人がルールとして守るべきものだと強く感じました。

事故に遭うことは、滅多に無いかもしれませんが。

そのため、僕のように油断してしまう人も多いと思います。朝、学校へ行く前に親から「気を付けて行きよ。」と念を押されますが、正直聞き流していることがほとんどです。でも、事故は起こってからでは遅いのです。命は大切に重いものですが、ちょっとしたことで失われてしまうこともある、脆い存在です。だからこそ、僕たちは毎日の登下校を始めとする日常生活の中で、危険に対して注意深くあらねばなりません。僕はこのことを、今まで事故などの不幸に全く縁のない人にも、声を大にして伝えたいです。

それから、車を運転する人にも考えてほしいことがあります。歩行者、自転車の走行者にとっては、車は怖い存在です。その反面、車の運転者に対する甘えかもしれません。僕たちをよけてくれるだろう、と心のどこかで思っているところがあります。自分の自転車すれすれのところを、結構スピードを出している車が通り過ぎていくと、ひやっとします。僕たちも車の邪魔にならないように気を付けますが、車を運転する人にも、十分気を付けてもらいたい

す。

それから、以前から気になっているのが、スマートフォンを見ながら運転している人がいることです。さすがに運転中に電話をしている人は、あまり見かけませんが、赤信号で止まっている時や、走行中でも、下を向いている人がいます。正直、前を見て運転して、と言いたくなります。罰則が強化され、走行中の通話は控えるようになってきたのは良いことだと思いますが、スマートフォンに意識が向いていると、運転の操作や判断を誤らないとどうして言うのでしょうか。歩行者や自転車に乗る者から見ると、腹立たしさを感じます。ルールを守っている真面目な運転者も、同じことを思っているかもしれません。

僕たちは、左側一列での走行、ヘルメットの着用、道路標識を守ることを心掛けて、安全に対する意識を高めたい。だから、車の運転者さんたちも、お互いの人生が不幸にならないために、周囲が不安を感じるような運転はやめて、安全第一でお願いしたいです。

スマートフォンのことについて述べましたが、こ

これは自転車の運転者も同じです。まだ中学校生活が始まったばかりですが、数年後、高校生になった時の僕にも、しっかりと言い聞かせたいです。スマートフォンを見ながら、運転しては絶対にだめだ、と。

交通安全については、歩行者、運転者それぞれの立場で考えること、守るべきルールがあります。まだ始まったばかりの中学校生活を楽しくむためにも、交通安全に気を付け、交通ルールを正しく守って自転車の乗りたいです。

いつも通りに過ごすために

丹原東中学校 一年 飯尾 仁

中学生になって自転車通学を始めました。小学生のときは徒歩通学だったので便利になってとてもうれしい反面、危険も多く、注意しなければならぬことが増えました。特に、見通しの悪い商店街の道は右、左、右と必ず確認するようにしています。また、友達と一緒に学校から帰るときは二列にならないように気を付けています。まして信号無視は絶対にダメです。

こんな風に僕が気を付けるようになったのは、あれは忘れもしない二〇二三年九月十四日の夜の出来事があったからです。この日は待ちに待った修学旅行の前日でした。僕は週三日、隣町にあるそろばんスクールに両親の送迎で通っていました。いつものようにそろばんが終わって車で帰っていると、見通しがいいとは言えない交差点があります。そこは、角に家が建っていて、左右から来る歩行者や車が見えづらくなっています。小学校の全校集会などでも

気を付けるようにと言われていた場所です。その交差点で信号が青であることを確認して進もうとしたその時です。いきなり自転車に乗った男性が、赤信号であるにも関わらず飛び出してきました。しかもヘルメットを着用していません。父は急いで右にハンドルを切り、急ブレーキをかけてなんとか避けることができ、誰にもけがはありませんでした。しかし、一歩間違えると重大事故につながっていた可能性を考えると、とても怖い出来事でした。

今回のことで、注目すべき点が二つあります。一つ目は、自転車に乗っていた人がヘルメットを着用していなかったことです。子供はほとんどの人がヘルメットを着用しているけれど、大人は着用していない人が多いと感じます。事故に遭った時、ヘルメットを着用しているのとしていないのでは、重症の度合いが全然違うので、大人も百パーセント着用するべきです。

二つ目は、赤信号なのに自転車が飛び出してきたことです。たとえ車通りの少ない時間帯でも、信号無視は決してはいけません。交通ルールはしつ

かり守るべきことです。見通しの悪いところでは特に注意が必要です。

普通に生活していても突然このようなことが起こります。事故を防ぐためには、みんなが最低限のことをしておかないといけないということです。シートベルトを着用する、信号をよく見る、ヘルメットを着用する、右、左、右とよく確認する、というようなことを当たり前にできることが必要です。そうすれば、少しでも不幸な事故に遭う人を減らすことができますと思います。これからの生活をいつも通りに過ごしていけるように、一人一人が気を付けていきましよう。

油断は禁物

東予東中学校 一年 都谷 羽菜

「一瞬なら。一度なら。」

だけど、その一瞬、一度の油断が命をなくすことにつながってしまうかもしれない。

最近、ながら運転のニュースをよく見聞きする。

実際、車を運転している人も、歩いている人も、自転車に乗っている人も、たくさんの人が手に持ったスマートフォンに夢中になっている姿をよく見かける。

部活が終わり、私が自転車で下校していたとき、交差点から一台の車が飛び出してきた。その車とぶつかりそうになった私は、急いでブレーキをつかんだ。その車の運転手もスマートフォンを片手に持っていた。以前、私の家族が事故に遭ったときは、相手は一時停止をせずに家族の車に突っ込んできた。この事故で小さい頃からの思い出がたくさん詰まった車を手放すのはさみしかった。でも、家族の命を守ってくれたこの車には感謝している。このような

体験を通して、一人一人の少しの油断が多くの被害者を出してしまうこと、そして、たくさん悲しみを生んでしまうことを実感した。

私は中学入学と同時に徒歩通学から自転車通学となった。それに伴い、スピードを出し過ぎていたり、よそ見をしながら自転車で乗っていたりする人々を度々見かけるようになった。事故に遭ったという話もよく耳にする。私自身も、友達と一緒に登下校している際に左右確認を忘れて車とぶつかりそうになったり、友達との話に夢中になってよそ見をしてしまったりと、小学生の時より危ないと感じるが増えた。そのため、交通ルールを守ることが大切なことだと心から実感するようになった。地域の方々は私たちが安全に過ごせるよう配慮してくれている。横断歩道で見守ってくれたり、危なかったら注意をしてくれたり、車を幅に寄せてくれたりと、様々な場面で私たちの安全に気を遣ってくれている。だからこそ私たちも、急いでいてもスピードを出し過ぎないように、しっかりと交通ルールを守って交通事故に遭わないように心がけていくべきである。油

断して交通事故に遭ってからは手遅れだ。だから、
「あるとき交通ルールをきちんと守っていけば。」
と後悔しないためにも、正しい交通ルールやマナー
を守ることを大切さを再確認し、周囲に伝えていき
たい。そして、交通事故はいつ起こるかもしれない、
という危機感を常に持って登下校していきたいと思
う。また、私の家族は、運転中の事故を防ぐために、
車を停めるときや駐車場に入るとき、せまい道を通
るときは運転手に話しかけないように心がけている。
こうすることで危険なところでも以前より落ち着い
て安全に通ることができるようになった。

これからも毎日自転車での通学は続くし、家族の
車に乗る機会も多い。そして、大人になれば自分が
車を運転するようになるかもしれない。だから、今
のうちから運転中は油断をせず、しっかり交通ルー
ルを守り、中学校生活三年間を楽しく悔いのないよ
う過ごしていきたい。

命を守るために

小松中学校 一年 桑原 一真

僕が小さかったとき僕は本当にチャイルドシートが嫌だった。母の話によると、嫌すぎて海老反りやひどい時には、泣きわめいていたらしい。そんな僕を母はいつも叱ってくれた。母と車に乗るときはシートベルトをするようになったが、父や祖父の車に乗るときはシートベルトをしなかった。当時の僕は、「事故もしたこと無いし、シートベルト着用しただけではそんなに意味無いでしょ。」と思っていた。だが、その日習いごとのスイミングに行く途中、信号がちよつと前で黄から赤へと変わり父が急ブレーキをかけた。僕は、その日、シートベルトをしていなかった。前座席に思いつきぶつかってしまった。その時は、そのままスイミングへ向かったが、正直すごく怖かった。たぶんシートベルトをしていたら、座席にぶつかるといふことは無かったと思う。今回は急ブレーキで思いつき座席にぶつかったのだから、これがもし交通事故だとすれば、大

怪我や車外に飛ばされた可能性が高かったと思う。僕はこれをきっかけに、シートベルトは言われなくてもするようになった。

国土交通省のデータによるとシートベルトをしていない人はしている人より死亡率が後部座席で約五倍、助手席では約十五倍と、とても高くなることが分かった。たしかに警察の人達がシートベルトをしていない人達を取りしめるのは、国民の命を守るためにやっていることなんだと思った。しかも平成二十年からシートベルトの着用が義務化されている。だけどまだ後部座席のシートベルト着用率は未だに半分以下（警察庁）である。後部座席も事故したときは、大怪我になる人が多いと思う。僕は事故に遭ったことがないが、事故はいつおこるか分からない。どれだけ気をつけていても、相手がぶつけてきたら意味が無くなる。だからシートベルトを着用しないといけない。

僕は今中学一年生になった。それでも母から朝学校へ行くとき「気をつけてね。」と毎日言われる。他にも車に乗るときには、「シートベルトした？」

と聞いてくれてから出発してくれる。昔は「はいはい。分かりました。」という感じだったがあの急ブレーキの事があってからは、シートベルトの大切さが身にしみて分かっているのです、そのような軽い気持ちは全然なくなりました。以前は母の車に乗る時しかシートベルトをしなかった僕だけど、今は、父や祖父、友達の親などに乗せてもらう時もシートベルトをするようになった。また他の人にも「シートベルトつけた？」と聞くようにしている。

僕はこれからもシートベルトをすると同時に同じ車に乗っている人には呼び掛けを続けて気にしようと思っている。みなさんにも助かる命を守るために、シートベルト着用をぜひして下さいと言いたい。

「なぜ？」を考える

西条東中学校 三年 河野 壮一郎

僕は最近、「クロスバイク」にハマっている。自宅から片道七〇kmもある香川県の金刀比羅宮まで一人で行ったこともある。風を切って走るととても自由を感じる。最近はロードバイクにも興味が湧いてきた。インターネットでいろいろ調べる内に、ロードバイクの世界には「自動車や原付の前に出たり、走り出しのときにそれらより先に走り出したりしない。」とか「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」という暗黙のルールがあることを知った。法で定められているわけでもないのに、みんな必ず守っているらしい。

なぜ？自転車はあの風を切る自由さがいいのに。別にそのようなルールがなくても気持ち良く走れるのに。なんでわざわざルールで縛り付けるのだろう？でも、まあいい。僕は僕で自由にやろうと思うながら、僕はクロスバイクに乗り続けていた。

さて、僕はテニス部に所属している。放課後はい

つも学校から三kmほど離れた市営のテニスコートまで移動して練習をする。コートまでの道には住宅街やスーパーマーケットがあり、いつもたくさん自動車が自転車が行き交っている。先生からも何度も「気を付けろ。」と注意されたことがある道だ。

五月のある日、僕はいつものように通学用の自転車に乗ってテニスコートに向かった。その日も交通量が多く、コートまであと一五〇mほどのところで、何台もの車が信号待ちの長い列を作っているのが見えた。車の左側には自転車一台くらいなら通れるくらいスペースがあった。「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」少しだけあのロードバイクの暗黙のルールが頭をよぎった。でも、誰かが勝手に作ったルールだし……僕は車の横をすり抜けることにした。何台かの車の横をすると通り抜けた。ところが、である。あと三台で前に出られるというところで、前かごに入れていたラケットがある車のサイドミラーに当たってしまった。ハンドルよりも右側にはみ出ていたからだ。「しまった。」と思っただが手遅れだった。

僕は近くの広場に誘導された。車から降りてきたのは、放課後デイサービスの会社の方だった。その方はまず会社の上司の方に電話をかけた。僕もその方の電話を借りて母に電話をかけた。警察官もやってきた。デイサービスの上司の方も部活の顧問の先生もやってきた。

デイサービスの上司の方は、まず、乗っていた子供たちの無事を確認し、それぞれの子の保護者の方と連絡を取り、先に連れて帰っていただくよう手配した。顧問の先生は教頭先生に連絡をした。しばらくしてやってきた副顧問の先生に、「コート他の部員をお願いします。」と伝え、僕と一緒に現場検証に立ち会った。母は、自分の仕事を誰かにお願いする手配をしてから少し遅れて来た。僕の無事を確認した後、警察の人やデイサービスの人とのやりとりで忙しく動いた。

警察官はてきぱきと事情聴取や現場検証を行い、車が完全停止をしていたことを確認し、「君に一〇〇%の責任がある。」と告げた。

全ての手続きが終わるまで、僕はただ呆然と見て

いることしかできなかった。僕の少しの油断が、これほどの人に影響を与えたことへの大きな後悔とともに。相手の方は穏やかに僕を許してくださったが、僕の心は自分を責める気持ちでいっぱいだった。

全てが終わり、家に帰って考えた。多くの人の時間を奪い、心配と迷惑をかけたことへの後悔はもちろんだ。しかし、特に思い出されたのが、あの「信号待ちで並んでいる他の車両を追い抜かない。」という暗黙のルールだ。あのルールはこのような事故を経験した「誰か」が「同じような事が起こらないように」という気持ちで作ってくれたのではないか。僕はもう一度絶望した。

僕はルールが嫌いだった。僕たちを縛るものだと思っていた。交通ルールだってそうだ。自転車で並走ができれば、友人と楽しく話しながら登下校ができるのに……。

しかし、この事故で、僕は「誰か」が決めたこの世の中にあるルールには、確かな「意味」があることを理解した。特に、交通安全のための法やルールは命に直結するものだ。ルールは僕たちの命や安全

で豊かな暮らし、世の中の秩序を守るために作られているのだ。だからこそ、「このルールがなぜあるのか？」を考えることは、いつ起こるか分からない事故を予防することにつながる。そうして、自分を含めたみんなが笑顔で安全に暮らす未来が守られていく。

これからも僕は自転車に乗り続けるだろう。しかし、今までの僕とは違う。ルールを守って安全で楽しい最高の自転車ライフを送っていかう。何より、「なぜ？」を考えることで、みんなの安全を守っていかうと僕は決めた。